

復興庁総合フォーラム

東日本大震災からの復興の現状と取組

日時 2015年3月15日（日）13：30～15：30

場所 東北大学 川内萩ホール

被災地で活動する方々の声

遠藤 雄幸 氏：

このような機会を与えていただきまして、誠にありがとうございます。ただ今ご紹介をいただきました、福島県川内村村長の遠藤雄幸と言います。

4年前の3月11日、午後2時46分、マグニチュード9の地震が、東北の沿岸部を襲いました。まさに東日本大震災の始まりでありまして、私も福島県、そして川内村にとっては、放射能との戦いが始まった瞬間であります。

私の村は、ご覧のように極めて自然豊かな、田舎の原風景を残している村であります。目の前に、田んぼや畑がありまして、そのまわりに民家があります。そして、その後ろには、森林の恵をいただいております里山が、後ろのほうに存在しております。こういう自然豊かな所であります。先祖代々田んぼや畑、さらには森林を受け継いで、そして生業も受け継ぎながら、生活を営んでおりました。当然、現在のわれわれも、自分の後に、自分の子どもや孫に、やはりこういう自然豊かな所を受け継いでほしいと、誰しもが思っているところであります。

ところが、こういう所に放射性物質が降り注いでしまったわけです。ですから、過去も否定され、さらには自分の子どもや孫にも受け継がせたことに、とても慎重にならざるを得ない。つまり、未来へもつなぐことができないというのが、今回の原発事故でありました。ですから、一言で復興と言うならば、生きがいや誇りをどう取り戻していくか、ということに尽きると思います。その戦いが、今、戦いを進めている、というところでもあります。

川内村は、沿岸部のこの位置にあります。第1原子力発電所から、20キロから30キロの所に位置しております。その南のほうに、第2原子力発電所がございます。ここからも、同じように20キロから30キロの所に位置しております。

震災の年の航空機のサーベイによる線量率です。ここが第1原子力がある所です。色の濃い所が、線量の高い所です。北北西に伸びているのが、お分かりになると思います。私の川内村は、ここです。比較的線量が低い、ブルーの所が多いことも、この線量率でお分かりになると思います。小さい円が20キロです。その外側が30キロという範囲です。ですから、30キロ以内に、村全体が入っているというところなんです。

原発の影響は、もう計り知れませんが、原子力発電所の構造は知っていても、じゃあ、放射能って何？ 放射性物質って。人間の体にどういう影響を与えるのということ、そういう情報は分かりませんでした。で、知らないっていうことへの不安、それから情報の伝達にお

いて、初期の段階ですけど、なかなか行政や、東京電力の情報が、なかなか信じられない。そういう、こういう不信感が、実は4年過ぎても、行政の不信感となって現れております。それから、風評被害、いわれなき差別との戦いも、今、始まっているところです。避難をすることによって、環境がガラッと変わります。ですから、慣れない所での避難生活において、健康への不安、それから、今後どうなっていくんだろうと、先行きが見えない中での喪失感や、閉塞感、苛立ち。こういったものが、避難生活を強いられている住民の人たちに、覆い被っております。それから、今後働く場所はどうなるのか。そして、私どもの主産業でありますお米は、作れるのか。野菜は出荷できるのか。それから、乳牛や和牛の畜産業も盛んな所です。目の前で殺処分が行われている。当然、その労働意欲や就業意欲が減退していくということです。それでも、比較的線量が低かったということ。

それから、原発の方、水素爆発の可能性は極めて低いということで、2011年の9月に避難準備区域、20キロから外が解除されました。それに併せて、翌年の1月の31日に、戻れる人から戻りましょうと。心配な人は、もう少し様子を見てからというような、帰村宣言をいたしました。

実は、この宣言の前に、すでに村民の人たちが避難生活に耐えられなくて、自分の家に戻っている村民が250人ほどおりました。この4年間、ただ単にその自分の家、自分の故郷に戻るのに、どうしてこんなに難しいのか、ということを感じてきました。制約や制限をするつもりはありません。いつまでに戻ろうとか、全員で戻るなんていうものは、もう不可能だというふうに思っております。ただ、戻れる可能性があるならば、まず自分たちの手で、その可能性を広げていこうと考えました。

戻るためのキーワードです。一つは、選択です。もう村には戻れない、戻るつもりはない、というような住民もいます。戻る人、それからまた避難をする人。中には、もう戻らないと決めている人たちもいます。そういう人たちの思いを、しっかりと受け止めて行こうというふうに考えました。

それから、自立です。やはり、現在20キロ圏の中は、まだ補償や賠償が続いておりますけども、やはり最終的には、そういう補償に頼らない、自分たちで自立していく、依存しない生活をどうイメージしていくか、サポートしていくかということが大切だというふうに思っております。三つ目は、信頼です。一度失った信頼をどう再構築していくかということが、復興にはとても大切です。行政と住民、あるいは、ものを作る人と消費者、生産者と消費者。あるいは、中には親子、あるいは夫婦関係。こういう絆をどう復活させていくか、信頼関係を再構築していくかということには、やはり復興には欠かせません。様々な問題があります。課題とか、除染、線量を下げていくということ。それから、先ほども言いましたけども、働く場所です。それから、低線量被曝への影響が、人間の身体にどう影響していくのか。今後の健康管理、子どもたちの教育、それから主産業である農業や林業、畜産をどう再開していくのか。そして、生活に必要なための買い物ができるようなお店屋さん、それから道路のインフラ整備、そして補償や損害賠償。どれ一つ欠けても、実は住民の人たちは、

やはり戻れないね、というような反応をしてしまいます。

今日は、特に、除染と雇用の話をさせていただきます。これは、除染の、ある一部分です。後ろに木がありましてね、枝を落とします。さらには、落ち葉をかき出します。かき出した落ち葉や、それから、庭は、5センチほど表土を剥ぎ取ります。はぎ取った土や落ち葉は、このブルーのフレコンバックに詰め込みます。こういう作業を、延々とやるんですよ。

これは、戻ってきて、最初にやったのは学校、小学校の除染作業です。高所作業車で、高圧洗浄で、屋根の放射性物質を洗い流しております。子どもたちが遊ぶ校庭の表土を剥ぎ取ります。そして、すべてこういうフレコンバックに入れます。この中は、タイベックスーツを着ながら、校舎の中のロッカーや、本を、一つ一つ丁寧に拭いています。作業員の中には、子どもたちの保護者もいます。そして、除染作業は大体終わりました。家の周りの除染、さらには農地の除染、道路の除染。道路の辺り除染が少し残っておりますが、大体終わっております。

左の図は、放射線量の状況です。これは、2011年の11月の線量です。色の濃い所が線量の高い所です。これが2年後、除染したらどうなったかということです。色の濃い所が少なくなつて、少なくなつて、ブルーの所が多くなりました。自然減衰と合わせて、意図的にその除染をしていくという効果がある、というように思いますね。

それから、働く場所をどう確保していくか、ということが最大のテーマでありました。民間企業の企業3社ほど進出をしていただきました。それから、野菜工場。これは自前といたしますかね、行政が立ち上げました。今、メガソーラーも3カ所工事が進んでおります。9メガワットです。それから、今年から工業団地の増設、造成が始まります。今、7社ほど手を挙げていただいております。しかし、やはり課題もあります。なかなかその労働力が確保できないという、新たな課題があるのです。理由は、やはり職種によるミスマッチと、それから除染や復興事業など、単価の高い仕事が周りにあります。ですから、なかなかその工場の中で働こうという人たちが確保できない、できないという現実もあります。

これが進出してきた企業です。ハウスメーカーの四季工房というところの、木工製品を作るとこの工場です。それから、金型の工場で、菊池製作所といたします。それから、大阪に本社がありますけども、蓄光タイル、光るタイルを製造するコドモエナジー。そして、野菜工場です。

これは野菜工場です。完全密閉式。水耕栽培です。ですから、土を使わないという野菜の作り方です。現在、福島県のスーパーや、都内の業務用なんかにも出しているところです。

震災前、約3,000人の人口がおりました。現在、2月の状況で2,736人です。高齢化率、65歳が36%、まあ、37%ですね。で、現在、村に戻って生活している人たちが1,584名、約1,600人で、6割の方が、今現在、生活を再開しております。

まとめになりますが、やはり冒頭に言いましたように、自分たちの村で生活する意義、あるいは、その誇りをどう取り戻していくか、ということが、復興だというふうに思っております。お金の問題、保証させることは、当然、重要ですけども、それ以上に、光を見せてい

く。希望や目標を見失わないようにしていくということは、さらに重要だと思っています。いくらお金をつぎ込んでも、光のない所に、それはお金をつぎ込んでも、生きたお金というわけにはいかないと思います。

それから、もう4年になります。できるだけ短期間に事業展開をしていく、ということです。もう戻らないっていう選択肢が、だんだんだんだん増えていきます。それから、二極化が鮮明になってきています。戻る人、戻らない人。それから、自分たちで作ったものを、生産してそれを売るんですけども、それを食べる人、食べない人。こういう対立構造が、今、生まれようとしております。戻るためには、やはり、新たな制度設計が必要です。インセンティブが必要かな、というふうに思っております。今後、村もですね、もうひょっとしたら震災前にも戻らないだろう。残念ですけども。とすれば、新しい村づくりをイメージしております。できるだけ行政コストのかからない村をつくっていかうかな、というふうに思っております。2万ヘクタール、僕の所はありますけども、できるだけ村の中心部にコンパクトな村づくりをしていかう、というふうに思っております。

最後になりました。これまで、本当に皆さん、多くの方々のご支援をいただいてまいりました。そういう皆さんの期待に応えていくためにも、しっかりと復興していくと。新しい村づくりをしていく。その姿を皆さんにお示しをすることが、恩返しなのかな、というふうに思っております。

併せて、最後に一つだけお願いがあります。ぜひ福島に来て、福島を見て、福島を感じて、そして福島から学んでほしい、と思っております。

ご静聴ありがとうございました（了）。